

いの流水俳壇

友草 水月選

「当季雑詠」

新茶吸む妻と和菓子の一ひととけ刻を

大川 節弥

〔評〕何となくやかで至福の一句でしようか。

京菓子であるうか。菓子をつまみながら新茶を飲んでいるご夫婦、和菓子の匂い、新茶の香りが漂ってくるようである。何やかやと慌ただしい世相の中、お孫さんの話でもしていたであろうか。穏やかに心温まる句であり、老夫婦の生活の一齣である。

○新茶吸む母の齢をはるか越え

中村 苑子

佇たずめばほたるの袋の親したしかり

田薦恵美子

〔評〕庭に咲いている花を見ているのであろうか。佇んでその花を見ていると、今まで気が付かなかった花の状態、釣り鐘状の大きな花が思っていたより親しい花だと愛着を感じたのである。

花に蛍を入れて遊んだので蛍袋と言われているが、実は「蛍袋」ではなく「火垂袋提灯ひたれあし」のことだとも。花の色には紅紫色と白花があり、赤提灯、白提灯とも呼ばれ、日本全国、韓国、中国などに分布している。

○人声の蛍袋に来てやさし

振り向けばふり向いてをり日傘の娘

間 浩太

〔評〕日射しが強い道で日傘をさした若い娘とすれ違った。見たことがある娘、誰だったろうと振り向く作者。日傘の娘も見覚えの

あるおじさんかなと同時に振り向いたのである。作者と日傘の娘の動作や表情が読みとれる句で私たちも日ごろよく経験することである。

日傘は江戸時代に紙を張った日傘が流行し、明治時代になって西洋からパラソルとして伝わった。日傘は夏の季語で春は「春日傘」という。

○唐寺を出る真白な日傘かな

有馬 朗人

咲き終えし鉢の剪定朝涼し

川村 博子

〔評〕鉢植えの花が散ってしまったので花木の若返りのため剪定したのである。剪定することによって新しい茎が伸び、またたくさん花を咲かせる。花木ではさつき、草花では石竹など剪定が必要である。

6月とはいえ真夏日が続いているが朝はやはり涼しい。季語の「涼し」は朝夕の涼しさ、水辺の涼しさ、星の涼しさなど暑さの中の涼しさを捉え表現する。

○酒蔵の裏涼しくて朝の市

沢木 欣一

二句抄

一揺りする度馴染む実梅かな

津田 久美

故郷は老人ばかり麦の秋

國田 貞子

田水張る光と風に山ゆらぐ

森岡 照月

子ツバメや二世帯ほどが朝の舞

岡本とも子

尾瀬ヶ原白ひ恋入水芭蕉

片岡 包女

七十路の背丈を越えし立葵

小野川町子

朝刊の入る音のして明易し

片岡 包女

テールに眼鏡が一つ梅雨の午後

小野川町子

耕しの一鍬ごとに鳥はな舞す

小野川町子

万緑に渡る風あり鶯うぐいす舞う

小野川町子

紫陽花の彩を映して川渡る

小野川町子

ランドセル揺らせ走る子梅雨に入る

小野川町子

夕立の土掘るとき音立てて

紫陽花にもて遊ばれる老の恋

青嵐相合傘で濡れている

蜘蛛去らず叩き落としてナンマイダ

梅雨晴間田園渡る風みどり

紫の花多き庭さみだるる

紫陽花が通夜の帰る慰める

谷水をたふたふ流し落晒す

釣糸の瀬音にまじる河鹿笛

青葉光系通す問の止める息

名 句 鑑 賞

閑さや岩にしみ入る蟬の声

静まり返って物音一つしない寂寞とした

山寺。蟬の鳴き声が大きな岩の中まで染み

込んでゆくようだと感じたのである。この

山寺は山形県の立石寺で詠んだ句である。

私も約20年前前県退職教員の秋の研修旅

行に参加し、1千段余の石段を昇りこの寺

を訪ねた。

急な石段、凝灰角礫岩の風化した奇岩

怪岩の山道は初秋の風が吹いて蟬の声を

聞くことも汗をかくこともなかった。紅葉

の名所ともなっている山寺であるが紅葉に

は少し早かった。眼下に広がる平野や連な

る山々の眺望、断崖にへばりつく仏閣宗教

の偉大さを感じたことであつた。芭蕉46歳

旧7月13日の午後、「岸をめぐり岩を這い

仏閣を拝し佳景、寂寞として心すみ行くの

みおぼゆ」と述べている。

竹崎たかひろ

岡村 嘉夫

大川 節弥

田薦恵美子

間 浩太

川村 博子

友草 水月

水月

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

松尾 芭蕉

有料広告

医療法人 森木病院
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析